

実施主体、事業名などの概要

- ・事業名：～100年後も続く観光と自治～リジェネラティブツーリズム創出事業
- ・実施主体：一般社団法人E'more秋名
- ・対象地域：奄美大島秋名地区（鹿児島県龍郷町）
- ・対象とする良好な環境：自然共生サイト「奄美大島真米（まぐむ）の里 秋名・幾里・大勝」

地域の現状・課題

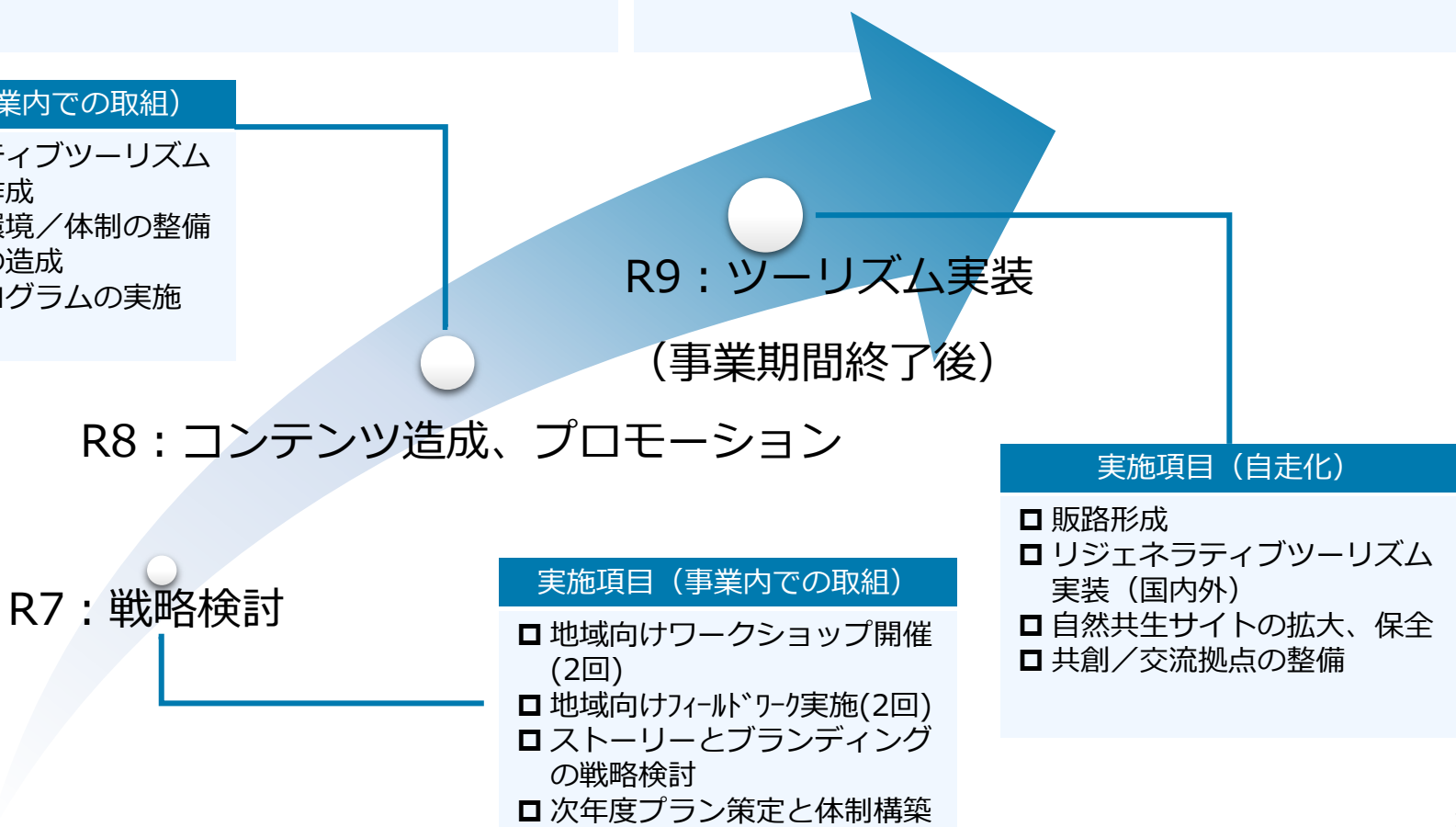
- 世界自然遺産及び国立公園のある生物多様性豊かな自然と、その自然と調和した暮らしが残る文化色豊かな地域
- 人口減少や生活様式の変化により、奄美らしい暮らしや文化の礎となっていた稲作と田園風景が消えつつある

目指すべき姿（中長期ビジョン）

- 観光客が来れば来るほど暮らしも自然も豊かになる“100年後も続く、観光と自治”の実現による文化と流域の再生
- 実現に向けた観光客等への自然・文化体験と交流による、暮らし・課題の共有、共感者創出（関係人口化）

実施項目（事業内での取組）

- リジェネラティブツーリズムの訴求素材作成
- 受入設備／環境／体制の整備
- コンテンツの造成
- モニタープログラムの実施



R7：戦略検討

実施項目（事業内での取組）

- 地域向けワークショップ開催（2回）
- 地域向けフィールドワーク実施（2回）
- ストーリーとブランディングの戦略検討
- 次年度プラン策定と体制構築

R8：コンテンツ造成、プロモーション

R9：ツーリズム実装
(事業期間終了後)

実施項目（自走化）

- 販路形成
- リジェネラティブツーリズム実装（国内外）
- 自然共生サイトの拡大、保全
- 共創／交流拠点の整備

対象となる良好な環境の概要



- かつての奄美北部有数の要衝地。大島紬「秋名バラ柄」発祥地として紬の生産も盛んに行われ、経済・文化両面で隆盛を極めた。
- 五穀豊穡を祈る国指定重要無形民俗文化財「秋名のアラセツ行事」が450年以上継承され、伝統と文化色豊かな地域。
- 奄美群島国立公園地域に含まれ、奄美群島最大級の田園を有し、消えつつある奄美らしい景観と奄美文化の根幹となる稲作が残る地域。
- 稲作が行われる水田が自然共生サイトに登録され、アラセツ行事等への稲藁の提供や、自然栽培・生態調査による保全も行われている。

良好な環境に係るストーリー

□ 固有種や絶滅危惧種が数多く生息し、生物多様性の豊かさが評価された世界自然遺産の島。

□ その自然と調和した暮らしによって育まれてきた伝統・文化・精神性の根幹にあるのが稲作。

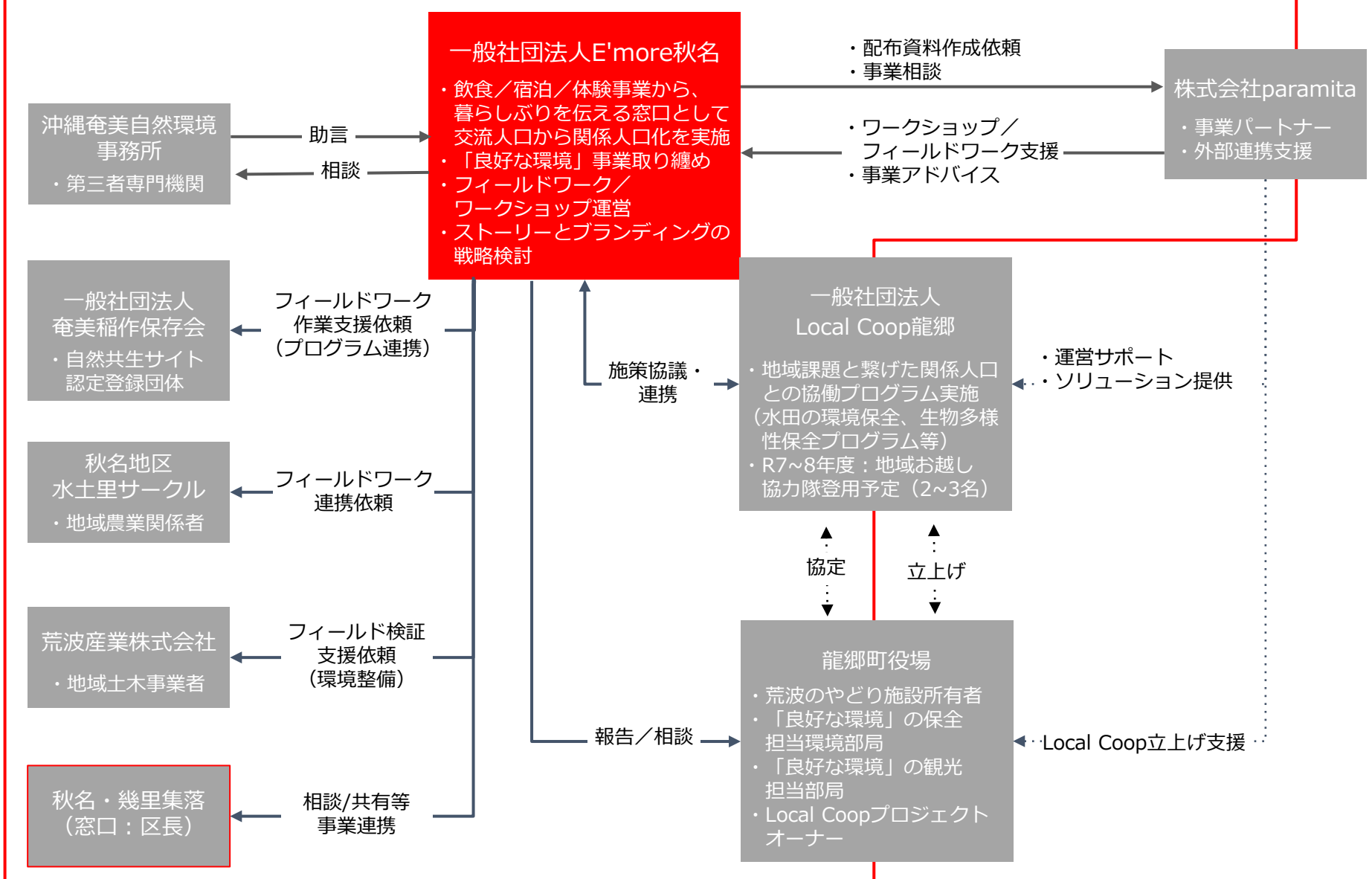


□ 秋名の水田は、屋久島～与論島の南北約460kmで数少ない湿地帯であり、サシバ（絶滅危惧種）など渡り鳥の希少な餌場。多様な生き物が生息する場所として、生物多様性保全の観点においても重要な地。

□ 人口減少や生活様式の変容によって、失われつつある田園風景。訪れる人々に魅力と課題を共有しながら、地域住民との交流を通して共に保全に取り組み、奄美らしい伝統・文化及び流域を再生し、継承する。

実施体制（図示）

R7年度リジェネラティブツーリズムに向けた「良好な環境」磨き上げのための調査・検討事業



【R7年度取組】

地域向けワークショップ①

- 良好な環境を生かしたプログラム組成に向け、受け入れる地域側の生物多様性と環境価値の理解を深める機会として、【第1回】住民参加型ワークショップ開催

地域向けフィールドワーク①

- 自然共生サイトでの生物調査のプログラム化検証の機会として、【第1回】住民参加型フィールドワークを開催。地域住民の地域資源の理解と共に、参加者自線のプログラムの課題と可能性をヒアリング

ストーリーとブランディングの戦略検討

- インバウンド市場調査
- インバウンド含むストーリーとブランディング戦略と施策計画の検討、策定。潜在的ニーズ層へのリーチ方法、インバウンドに対応した宿泊事業の再構築計画を検討。

地域向けワークショップ② & フィールドワーク②

- ありたい地域の可視化に向けた【第2回】ワークショップ開催/ビジョンマップ作成
- 良好な環境づくり協働プログラム検証として【第2回】フィールドワーク開催

特に工夫した点・取組成果

- 専門家により講演（座学）に加え、身近なフィールドを観察しながら、質疑を交わし地域住民の理解を深めた
- 地域内外29名が参加し、地域区長や農業関係者など地域キーマンへの共有と機運醸成

特に工夫した点・取組成果

- 地域農業団体へ協力要請を行い、地域関係者との協働により、解像度が高まり、地域との連携/協力度が向上
- 地元参加者から地域資源の魅力と面白さを体感できたというアンケート結果を確認

特に工夫した点・取組成果

- 生成AIを活用し、奄美群島におけるインバウンド市場の現状と課題を調査（8～9月）
- ターゲットエリア調査（10月）
- リーチ方法、高付加価値化、体制の計画化（9月～2月）
- インバウンド対応事業者との意見交換による情報収集からDMCの可能性を検討

特に工夫した点・取組成果

- 航空写真で地域住民の残したい場所と暮らしをヒアリング、マッピング（11月）
- ヒアリング結果の共有資料（配布資料）の制作（12月～2月）
- 水田で良好な環境作りフィールドワーク開催（12月）島内外から25名（うち、秋名から6名）が参加

R7年度のゴール

- 地域住民が地域資源（良好な環境）の価値と、リジェネラティブツーリズムの可能性を体感
- ストーリーとブランディング戦略、次年度実施施策・体制、モニタープログラムの計画策定

課題

- 地域住民とのビジョンの共有を通じた、地域運営と両立した持続可能な連携体制の構築
- 地域住民と事業関係者（地域外居住者、Iターン等移住者）の信頼・協働関係の構築
- 継続的なインバウンド誘客の流れ作り

取組内容詳細：フィールドワーク（生態調査）

■目的

- 自然共生サイトにおける保全活動の、観光コンテンツとしての可能性を検証
- 地域住民と農業関係者が資源を知り、地域外参加者と共に観光として行う保全活動を体験。リジェネラティブツーリズムのプログラムイメージを共有

イベント①
秋名・田袋 生き物観察会
～生態系調査ワークショップ～

秋名に広がる田んぼ（田圃）には、一体どんな生き物や植物がいるのだろうか？
「iNaturalist」というアプリを使って、見つけた生き物や植物を記録・観察してみよう！スマホやアプリがなくても大丈夫の小さいお子さんからおじいちゃんおばあちゃんまで、どなたでもご参加いただけるワークショップです。

日時：2025年8月30日（土）
10:00～12:30

場所：龍郷町秋名集落
集合場所：秋名コミュニティセンター（龍郷町農屋421番地1）

スケジュール：
10:00～10:30 オリエンテーション
10:45～11:45 生態系調査
12:00～12:30 振り返り、発見の共有

定員：20名程度
参加料：無料
参加方法：事前申し込み制

持ち物：
・飲み物（熱中症対策のためご持参ください）
・帽子（屋外の活動のため必須です）
・軍手（なければお貸しします）
・タオル
・スマートフォン（なくてもOK!）
・雨具（小雨の場合は決行します）

その他：
小雨決行、荒天時は事務局判断の上開催の可否を午前8時半までにご連絡します。

お申込みはこちら



■成果

- 秋名地区住民が20名参加（うち、農家17名）
- 地域外から8名のファミリーが一般参加
- 1時間の調査（体験）で33種の生物を同定
- アンケート結果（N数=8）
 - <定量> 満足度100%、再参加希望100%
 - <定性>
 - ・今まで見られない生き物が観察できて感動した
 - ・専門家が詳細に解説してくれて、とても勉強になった
 - ・地域の学校でもプログラムとしてぜひ導入して欲しい
- 地域農家が、参加者の反応や、農作業とは違う視点から、圃場の資源と環境を知る機会となった（昔と今の環境の変化、これだけ多様な生物が生息していること）



課題

- 農閑期／農繁期の圃場に合わせたプログラムの構築と地域関係者（農家等）との協力体制確立
- 流域全体の保全をとらまえた自然共生サイト及びプログラム実施フィールド（海／山含む）の拡大

取組内容詳細：インバウンド調査からのストーリーとブランディングの考察状況

■基本的な考え方

E'more秋名が宿泊の提供だけではなく、地域側の受入主体（ランドオペレーター/DMC）となり、荒波のやどりを拠点とした奄美大島及び秋名の滞在を設計・提供。秋名の滞在は、自然・文化・暮らしを「消費」ではなく、「地域と関係が生まれる滞在」をコンテンツの基本とし、宿泊・音声ガイド・交流体験を組み合わせ、共創プログラムの現場に訪れるなど、土地の背景や営みを「知る→感じる→関わる」プロセスを共有し、旅が“思い出”ではなく“関わりへの入口”となることを目指す。

インバウンド富裕層は、思い入れのある地域には、継続的な寄付や交友関係への共有などにより、共感した地域への関わりと貢献が継続的に繋がる傾向にあることを踏まえ、再訪如何に関わらず、共創プログラムへの“関わりしる”の導線として期待できる。

■コンセプト（滞在価値）

静けさと余白のある時間

海と田袋が連続する景観と暮らしの文脈

説明に依存しない、体験による理解

観光として消費するのではなく、土地と関係が始まる滞在を提供

■ターゲット

第1候補：オーストラリア（年間訪日者数：約60万人規模）

自然・野生生物・島嶼部観光への関心が高い

混雑回避、滞在型旅行を好む

SNS・口コミによる情報拡散力が高い

第2候補：米国・カナダ（年間訪日者数：約300万人規模）

体験・物語・文化理解に対する価格許容度が高い

長距離移動でも明確な理由があれば地方を選択

第3候補：フランス（年間訪日者数：約30万人規模）

個人手配比率が高く、文化・編集的価値を重視

数は少ないが、レビュー・記事・紹介による波及力が大きい

■滞在プログラム（イメージ）

【DAY 1】Arrival | 島に「入る」日

- 奄美到着（空港 or 港）
- 移動中：音声ガイド①「奄美の成り立ち/島の暮らし」
- 荒波のやどり チェックイン
- 夕方：島料理づくり体験
- 夜：島料理を食べる
音声ガイド②「夜の音・暗さ・島の時間」

【DAY 2】Context | 土地を「理解する」日

- 午前 • 朝の集落/海/田袋をガイド
 - 音声ガイド③「カミヤマとカミミチがつながる理由」
- 午後 • 文化体験（行事参加/大島紬見学/泥染体験等）
 - 音声ガイド④「秋名と“関わる”ということ」
- 夜 • オーベルジュ（島内他事業者）にチェックイン、宿泊
ディナーは、島食材を使った創作フレンチコース

【DAY 3】Departure | 関係が「始まる」日

- 移動中 音声ガイド⑤「秋名とこれからどう関わるか」
- 帰路へ（「関わり続ける理由」を言語化しないまま、残す）

課題

□ 外部関係者（地域住民・ガイド等事業者）との連携体制構築

□ プログラムに対応した運営体制再構築（スタッフ確保/育成・多言語対応・予約～到着～出発の動線等）

取組内容詳細：地域向けワークショップ②

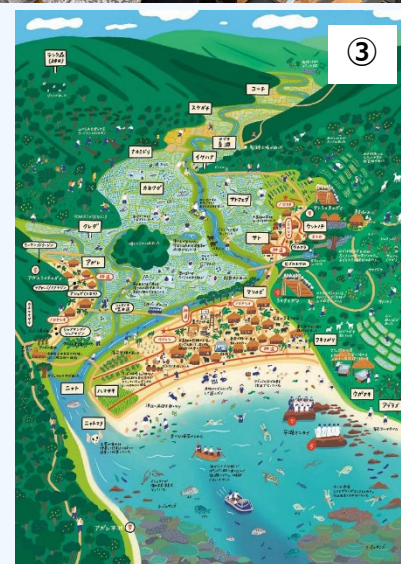
ありたい地域の可視化に向けた【第2回】ワークショップ開催／ビジョンマップ作成

■目的

- 高齢化により、古老が年々亡くなり、このままでは、地域の暮らしぶりや文化が失われる危機感が、地域にも芽生えていた。
- 昔を知る年配世代から、懐かしい暮らしぶりを聞き取り、かつてあった良好な環境の資源と暮らしぶりを記録するとともに現役世代へ共有し、ありたい地域未来への思いをヒアリング
- 100年後も続く観光と自治に向けた、地域内外の目線合わせとして、守りたい/取り戻したい暮らしと良好な環境を可視化（懐かしい地域未来図を制作）し、全地域住民と共有。
- 今後のリジェネラティブツーリズムのコンテンツ制作の活動指針として活用。（非言語による地域内及び来訪者との思い共有）

■成果

- かつての暮らしぶりや資源を最も知る80代以上の秋名住民（8名）に聞き取り実施、本ワークショップの意義やこれからの活用に対して強い共感が得られた（写真①_11/17実施）
- 地域のかつての暮らしや資源を秋名の現役世代（10名）へ共有し、残したい記録や地域資源について意見を確認（写真②）
- 「懐かしい地域未来図」として、ビジョンマップ（写真③）を制作し、集落へパネル寄贈、全戸へ手拭い（デフォルメ版）配布。地元自治体（龍郷町）にも保全活動事例としてイラストを共有。
- 現役世代の機運盛り上がりにより、地域資源調査の追加実施要望が上がり、年配世代と共に資源調査を実施、ビジョンマップに追加情報として反映。



課題

- 来訪者（観光客等）への伝わる伝え方となる、ビジョンマップを活用したコンテンツとの連動
- ビジョンマップに反映しきれなかった情報（資源/地域の思い）の地域内外への共有方法

取組内容詳細：地域向けフィールドワーク②

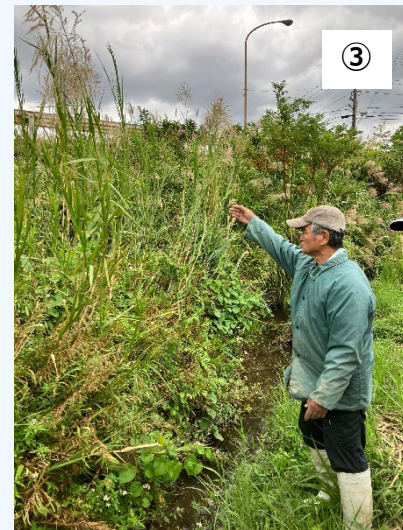
良好な環境づくりの協働プログラムの検証

■目的

- 稲作文化の継承に向け作業環境の改善（水捌け向上）と、生物多様性の保全と再生を目して、協働プログラム（排水路への石積み）を観光コンテンツとしての課題と可能性を試験的に検証
- 地域関係者が具体的な協働プログラムを体感し、本事業で目指すリジェネラティブツーリズムの実施イメージを共有
- 協働プログラムに対して関心を持って参加する地域外参加者が存在することを地域として体感し、可能性を知る
- リジェネラティブツーリズムの今後のコンテンツ制作にあたり活動イメージをステークホルダーに共有する素材として活用

■成果

- 耕作放棄地としての課題や、生物多様性の観点で保全／再生すべきフィールドを地域関係者と共に検討し、実施場所の選定や地権者への説明/調整など、準備段階から集落と連携（写真③）
- 12/24,25に島内外から25名（内、秋名：7名、島外：7名）参加（写真①）し、島外参加者7名の内、4名が荒波のやどりを利用
- 雑草が鬱蒼と茂り、土堀が崩れ、土が流れ込んでいた排水路（写真③）が改善（写真②）し、作業中にはオオウナギやシジミ、カワニナ、モクズガニなどの生き物が観測された
- 景観の変化により、地域から本事業への共感の声が増えてきた
- アンケート結果（N数＝8、満足度100%,再参加希望100%）
 - ・地域の方と一緒に作業しながら話すと、距離が縮まった感じがして嬉しい
 - ・参加者と地域の人が楽しそうに交流している様子が良かった



課題

- 地域側参加者の参加意欲、モチベーション維持（習熟度向上、観察イベントなど“場”の継続的活用等）
- 民間（島外企業等）との事業共創や企業研修なども含めたプログラムの安定的継続性の確立

本事業を通して実現する「保全と活用の好循環」の仕組み

保全の具体的内容・方法

- 用水路の勾配や排水機能の維持を、石積みなど自然土木を活用した生き物も生息しやすく、耕作のしやすい（乾きやすい）田んぼとして整備
- 地元農家が取り組む冬季湛水農法（※）と連携しつつ、稲作の就農ハードルを下げ、耕作放棄地の解消を推進
- 活用困難圃場は、ビオトープ化などを進め、秋名地区の自然共生サイトを拡大、流域全体の保全に取り組む

※冬季湛水農法・・・

稲刈り後の水田に冬の間も水を張っておく伝統的農法。水田の生物多様性を保全する環境配慮型農業の一種。雑草を抑制し、生産効率を高める効果も期待される。

活用の具体的内容・方法

- 宿泊施設を起点とした集落の食や体験の提供が生まれ出す触れ合いにより交流人口から関係人口につなげる
- 良好な環境をフィールドにした流域の保全と再生を題材にし、継続的に地域外の個人・企業を巻き込みながら、コンテンツ構築と協業を創出、島外資金を獲得
- 用水路整備や生態調査等の保全活動を地域団体と連携し、観光コンテンツや企業研修としてプログラム化

活用から保全への還元方法

- 人口減少化における担い手不足対策として、地域活動や環境保全活動への地域外人材の獲得
- 観光等継続的な来訪者による経済循環を生み出し、保全に携わる人材（ガイド等）の雇用と育成機会を創出
- 教育委員会、小学校等との連携により、次世代への体験機会（イベント、環境学習プログラム等）の提供
- 保全に携わる人材の流動性が高まることによる、地域景観や環境の保全サイクルが活性化
- 地域資源（文化・自然）保全プログラムの反復による変化が、地域のさらなる自治意欲を高める

【R8年度取組】

訴求素材作成

- 「良好な環境」に係るストーリーを国内外へ発信するプロモーション映像を制作（完成：1月ごろ）

コンテンツ造成

- 宿泊事業と「良好な環境」の連携、動線を見据え、ビジョンマップを踏まえた、地域資源の価値とストーリーを織り込んだオーディオガイドアプリ（on the trip）を多言語対応で構築。（完成：11月ごろ）

受入環境/設備/体制整備

- 宿泊事業のインバウンド対応体制強化（掲示物、パンフレット、ホームページ等の多言語化）（完成：1月ごろ）

モニタープログラム実施

- 企業及び個人（国内外）向けモニタープログラム（1～2回）を開催。実施を通して検証及びプロモーションを実施。（モニター実施：9月～11月）

想定する成果

- 秋名地区の景観や暮らしぶり、ストーリー性を言語だけのみならず、視覚的に訴求し、滞在イメージを高める
- SNS、YouTube等で奄美大島、秋名という地域の環境、文化的魅力と認知度を広げる

想定する成果

- 宿泊施設への滞在から音声ガイドを活用し、地域資源に触れたり、交流を促すなど、滞在中の過ごし方を誘導することで、ストーリーを体感し、良好な環境への理解と共感性、体験付加価値を高める

想定する成果

- インバウンド観光客の宿泊施設での快適性を担保
- 環境や文化に関心のあるインバウンド層へのネット上での訴求力向上

想定する成果

- インバウンドツアーへの対応体制強化、改善材料の獲得（運営体制の精査、外部関係者との連携チェック）
- モニター参加者を通じた体験価値の訴求

R8年度のゴール

- インバウンドにも対応したリジェネラティブツーリズムの受け入れ態勢構築
- モニタープログラム等を通じたインバウンド誘客の発信
- 地域住民がモニタープログラムの運営関係者（地域内外に伝える役割等）として参画

想定される課題

- インバウンド観光客へのプログラム提供にあたっての運用体制確立（雇用、委託先の獲得）
- 緊急時を想定したインバウンド観光客への対応力強化（既存スタッフとの連携含む）